Program

FINLAND FILM FESTIVAL in JAPAN　フィンランド映画祭2023

上映タイムスケジュール

	16:30	18:50
11.11 sat	ライト・ライト・ライト (91分)	バブル (102分)
11.12 sun	枯れ葉 (81分)	18:40 4人の小さな大人たち (122分)
11.13 mon	ファミリー・タイム (114分)	ハッピー・ワーカー (82分)
11.14 tue	ライト・ライト・ライト (91分)	バブル (102分)
11.15 wed	4人の小さな大人たち (122分)	ライト・ライト・ライト (91分)
11.16 thu	バブル (102分)	ファミリー・タイム (114分)
11.17 fri	ハッピー・ワーカー (82分)	18:40 4人の小さな大人たち (122分)

＊入場料金　1500円均一［税込］　全席指定・各回入替制
＊全作品日本語字幕
＊各作品の座席指定券の発売開始は11月1日(水)よりユーロスペース劇場窓口および公式HP(www.eurospace.co.jp)にて販売開始

■各種サービスの適用はありません。　■公式HPでは各種クレジットカードでのみ購入が可能です。
■公式HPでご購入のお客様はご鑑賞までに劇場ロビーにある発券機でチケットをお受け取りください。上映時間が近づくと大変混雑しますので、お早目のお受け取りをお勧めします。

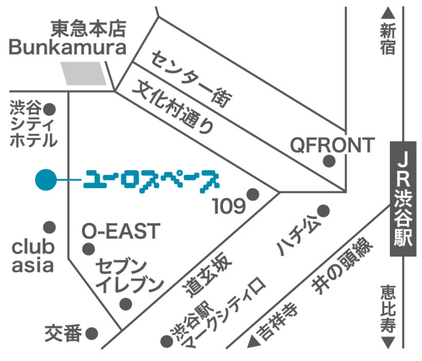
ユーロスペース

渋谷駅徒歩８分／渋谷Bunkamura前交差点左折
東京都渋谷区円山町1-5 KINOHAUS 3F
TEL:03-3461-0211

劇場への行き方

■「渋谷駅ハチ公前」→「109」の右側の文化村通り→(約3分)→「東急本店」向かって左側の道を進む→「Bunkamura前交差点(松濤郵便局前)」を左折→60m先右側

■「渋谷駅」→「マークシティ内通路」を通り抜け→「道玄坂上交番前」信号を渡り→「セブンイレブン」の左側の道を下る→150m先左側



フィンランド映画祭2023　15th ANNIVERSARY

FINLAND FILM FESTIVAL in JAPAN

2023年11月11日［土］-17日［金］
ユーロスペース

東京都渋谷区円山町1-5 KINOHAUS 3F

料金　1,500円均一［税込］　全席指定・各回入替制

劇場 HP > http://www.eurospace.co.jp　公式 SNS >

主催 ｜ フィンランド・フィルム・ファンデーション　特別後援 ｜ 駐日フィンランド大使館、フィンランドセンター
協力 ｜ 有限会社ユーロスペース、日本映像翻訳アカデミー株式会社

FINNISH FILM FOUNDATION　Embassy of Finland Tokyo　Finnish Institute in Japan フィンランドセンター　ユーロスペース EUROSPACE　JVTA 日本映像翻訳アカデミー

ドラマ

枯葉

Kuolleet Lehdet / Fallen Leaves

81分／2023年／カラー／デジタル上映

監　督：アキ・カウリスマキ
脚　本：アキ・カウリスマキ
出　演：アルマ・ポウスティ
ユッシ・ヴァタネン
ヤンネ・フーティアイネン
ヌップ・コイヴ
製作国：フィンランド、ドイツ
言　語：フィンランド語

©Sputnik　Photo:Malla Hukkanen

可笑しみと切実さに満ちた最高のラブストーリー

ヘルシンキの街で、アンサは理不尽な理由から仕事を失い、ホラッパは酒に溺れながらもどうにか工事現場で働いている。ある夜、ふたりはカラオケバーで出会い、互いの名前も知らないまま惹かれ合う。だが、不運な偶然と現実の過酷さが、彼らをささやかな幸福から遠ざける。果たしてふたりは、無事に再会を果たし想いを通じ合わせることができるのか？

アキ・カウリスマキは『過去のない男』（2002年）、『ル・アーブルの靴みがき』（2017年）等で知られるフィンランドを代表する映画監督。2017年『希望のかなた』プロモーション中に突然引退宣言をしファンを悲嘆に暮れさせたが、それから6年、新作『枯れ葉』をたずさえてファンのもとへと帰ってきた。『枯れ葉』は2023年のカンヌ国際映画祭審査員賞受賞、国際批評家連盟賞年間グランプリ等を受賞した他、フィンランドでも現在大ヒットを記録している。また来年のアカデミー賞国際長篇映画賞部門のフィンランド代表にも選出された。

2023年12月15日（金）より
ユーロスペース他全国ロードショー
配給：ユーロスペース

ドラマ

4人の小さな大人たち

Neljä pientä aikuista / Four Little Adults

122分／2023年／カラー／デジタル上映

監　督：セルマ・ヴィルフネン
脚　本：セルマ・ヴィルフネン
出　演：アルマ・ポウスティ
エーロ・ミロノフ
オーナ・アイロラ
ピエトゥ・ヴィクストロム
製作国：フィンランド
言　語：フィンランド語

4人の大人、それぞれの愛のかたち

夫マティアスがエンニと不倫していることを知ったユーリアは、合意の上で複数の恋愛関係をもつ“ポリアモリー”をふたりに提案する。寛大なユーリアに感激したエンニはすぐ提案に応じるが、マティアス自身は保守的な両親がどう思うかを非常に心配している。なによりマティアスは、ユーリアにも若くて美しいミスカのような人々と恋に落ちる自由があることを受け入れ難いのだ。それぞれに戸惑いながらも新しいタイプの関係を模索する4人だったが、エンニが偶然マティアスの子を妊娠し、その子を産むと決めたとき、全員の選択があらためて問われることになる。『4人の小さな大人たち』は中年に差し掛かる人々が痛みをともなう経験をへて心の成長をとげる、まさに愛の深淵に迫る感動的で人道的な作品。

セルマ・ヴィルフネン（1976 年生まれ）は脚本家としてプロのキャリアをスタートし、長編デビュー作『リトル・ウィング』（フィンランド映画祭2017上映）は2017年に北欧理事会映画賞を受賞。2作目の長編映画『Stupid Young Heart』は2019年にベルリン国際映画祭ジェネレーション部門にて最優秀作品賞を受賞している。

コメディ

バブル

Kupla / Bubble

102分／2022年／カラー／デジタル上映

監　督：アレクシ・サルメンペラ
脚　本：レータ・ルオツァライネン
アレクシ・サルメンペラ
出　演：ステッラ・レッピコルピ
トンミ・コルペラ
ミンナ・ハープキュラ
アモス・ブロテルス
製作国：フィンランド
言　語：フィンランド語

家族のデリケートな問題をユーモラスに描く心温まる作品

16歳のエヴェリーナの人生は、地元の小さなガソリンスタンドで母親が女性と情熱的なキスをしているのを目撃したことから狂い始める。エヴェリーナは両親が再び恋に落ちるように、少なくとも一緒にいられるように、何としてでもその情事を妨害しようとする。彼女が何か問題を起こせば、両親は彼女を支えるために協力しあう。自分が両親をつなぎとめる接着剤であることに気づいた彼女はうつ病を装うようになるが、やがてでっち上げと本当の不安の境界が曖昧になり始め、もはや真実あるいは自分の行動の有用性さえもわからなくなってくる…

アレクシ・サルメンペラはフィンランドの映画製作者で、その作品はベルリン国際映画祭、カナディアン国際ドキュメンタリー映画祭、サン・セバスティアン国際映画祭など主要な映画祭でプレミア上映されている。彼はユッシ賞において『Distractions』（2015）では最優秀監督賞受賞、フィンランド映画祭2018にて上映された『ヴォイド』（2018）では最優秀監督賞、最優秀作品賞を受賞している。本作ではステッラ・レッピコルピが最優秀新人賞に輝いた。

ドラマ

ファミリー・タイム

Mummola / Family Time

114分／2023年／カラー／デジタル上映

監　督：ティア・コウヴォ
脚　本：ティア・コウヴォ
出　演：トム・ヴェンツェル
レーナ・ウオティラ
エリナ・クニヒティラ
リア・カタヤ
製作国：フィンランド、スウェーデン
言　語：フィンランド語

居心地の悪い家族のクリスマスをシニカルにみつめるコメディ

雪の降るフィンランドの森の中に佇む素朴な家に、中年姉妹のスザンナとヘレナが家族を連れて帰省する。だが一家で過ごすクリスマスは、とても牧歌的とは言い難いものだった。毎年のように祖父は酒を飲み過ぎ、祖母はみんなの面倒を見なければならず、子供たちはうんざりし、スザンナとヘレナは無意味なことで言い争う。それでもクリスマスが終われば、それぞれが日常に戻っていく…。

ティア・クーヴォのユーモラスで痛烈なデビュー作は、誰もが共感できる問題を掘り下げている。私たちは同じパターンから抜け出せない運命にあるのか、それともいつかは幸せな家族になれるのか？

ティア・クーヴォは社会心理学を専門とする映画監督兼脚本家。2018年にヴァランド・アカデミーを卒業。現在ヨーテボリを拠点にスウェーデンとフィンランドで活動。『ファミリー・タイム』は彼女の同タイトルの卒業制作短編映画が原作となっている。この短編映画はタンペレ国際映画祭にて最優秀賞を受賞した。

本作はベルリン国際映画祭エンカウンターズ部門に初のフィンランド映画としてノミネートを果たしている。

ドラマ

ライト・ライト・ライト

Valoa valoa valoa / Light Light Light

91分／2023年／カラー／デジタル上映

監　督：イナリ・ニエミ
脚　本：ユーリ・ニエミ
出　演：レベッカ・バエル
アンニ・イーッカネン
ラウラ・ビルン
ピルヨ・ロンカ
製作国：フィンランド
言　語：フィンランド語

初恋、そのまばゆい光と生涯続く影を描く回想劇

原作は、2011年にフィンランディア・ジュニア賞を受賞した作家ヴィルヤ＝トゥーリア・フオタリネンの同名小説。1986年春、ソ連のチェルノブイリ原子力発電所が爆発し、ミミという名の少女がフィンランド西部の小さな村にやってくる。彼女はたちまち15歳のマリーアの人生をまばゆい光で満たしてゆく。20年後、マリーアは病気の母親を看病するためにその村に戻り、青春を謳歌した夏とその後の悲劇的な秋を回想する。初恋の痛みに囚われたマリーアは、罪悪感を捨て他人を許すことを学ばなければならなかった。

イナリ・ニエミ（1978年生まれ）はヘルシンキメトロポリア応用科学大学で学び2010 年に卒業。彼女は長編ドキュメンタリー映画『Robin the Movie』（2012）、フィンランド映画祭でも上映された2本の軽快なドラマ『サマータイム』（2014）と『ワンダーランド』（2017）を監督する。2018年には同映画祭ゲストとして来日もしている。その後ドラマシリーズ『Mieheni vaimo』（2022）も手掛けた。

ドキュメンタリー

ハッピー・ワーカー

The Happy Worker –
or How Work Was Sabotaged

82分／2022年／カラー／デジタル上映

監　督：ジョン・ウェブスター
脚　本：エヴェリーナ・カントラ
ジョン・ウェブスター
撮　影：ヤルッコ・T・ライネ F.S.C
スン・キム
編　集：キンモ・ターヴィラ
制　作：マルコ・タッリ
製作国：フィンランド
言　語：英語、韓国語

有害な職場は人々の健康と幸福を喪失していく…

職場は崩壊し、アフター・コロナに職場に戻ることを考えると、人々は恐怖でいっぱいになる。私たちは本当にいつも通りの仕事に戻りたいのだろうか？

沈黙の文化、見せかけの変化、無能な管理職、そして子供の教育方法まで、この映画はユーモアと皮肉に満ちた視線で、有害な職場がそこで働く人々の健康と幸福にもたらす非常にリアルな影響を捉えてゆく。この旅を案内してくれるのは、偉大な人類学者であり活動家でもある故デヴィッド・グレーバー（『ブルシット・ジョブクソどうでもいい仕事の理論』の著書）や、燃え尽き症候群研究の先駆者である心理学者のクリスティーナ・マスラークなどである。

イギリス人の両親を持ち、フィンランドで生まれたジョン・ウェブスターは、25年以上にわたってドキュメンタリー映画の監督とプロデュースを手がけている。映画の題材は様々であるが、興味をそそる個性的な人物を長期的に追いかけるのが彼の作品の特徴である。長年にわたり、彼の作品は世界中の幅広い観客に放送され、映画祭で上映され受賞している。ユッシ賞を2度受賞。